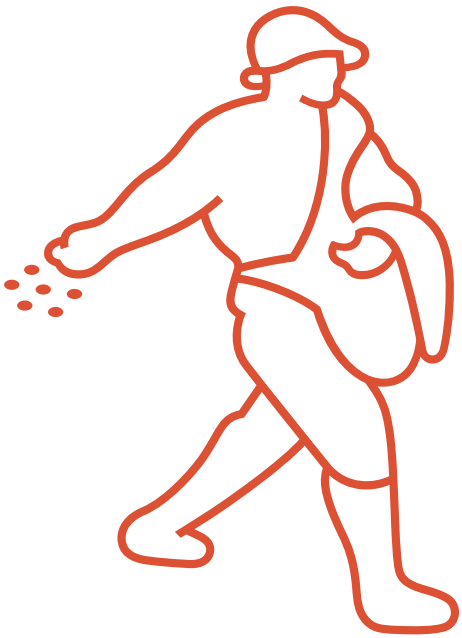
山梨県立美術館開館40周年記念

「文化の種まきプロジェクト」

美術館と私

―― エッセイ集 ――



種をまく 世界がひらく

山梨県立美術館

Yamanashi Prefectural Museum of Art

美術館でひらいた、
あなたの世界を
教えてください。

「美術館と私」エッセイ募集について

「美術館と私」エッセイ募集は、2018年に開催された山梨県立美術館開館40周年記念事業「文化の種まきプロジェクト」の一環として企画しました。

山梨県立美術館との関わりをエッセイや詩、メッセージ、コメントなど自由な形式での応募を行い、全国から77作品の応募をいただきました。応募作品全編を収めたエッセイ集を発行、受賞作品及び一部の作品を美術館エントランスに展示しました。

エッセイ募集には、開館当時の貴重な思い出や作品との出会い、そして、皆様の人生の一部に寄り添うように作品や当館が存在してきたことなど、当館との深いつながりが感じられる心のこもった多くの作品をお寄せいただきました。

今回は、その中から反響のあった作品を中心に９作品をご紹介いたします。あたたかな想いを共に過ごしていただけましたら幸いです。

＊掲載作品の年齢は募集当時(2018年)の年齢です。

山梨県立美術館

2018年10/16～3/3　美術館エントランスにて

貧農人

ひんのうびと

佐藤ゆずる　北海道　57 歳

もうあれから40年もたったのか

開館前夜の夕方5時頃16才の僕は閉められた美術館の入口門の前に立っていた

種をまく人をだれよりも最初に見てみたかったから、

そこに座りこんで徹夜した

するともう一人大学生がやってきた。彼も1番のりを目指していたがすでに僕がいたのでがっかりしていた

寒かった。その大学生がお酒をもっていて体をあたためるためにチビチビ飲みながらいろんな話をした

夜が明けた。晴れていた。山梨の文化の夜明けだと思った。開門とともにダッシュして種をまく人の前に立った

徹夜明けで頭がボーッとしていて腹がへっていたからピントがぼけてみえた

暗がりの中で農人が種をまいていた

男なのか女なのかはわからなかった

その後 山梨にまかれた文化の種は根をはり発芽したのだろうか。

僕はその時音楽活動、教育市民活動を何年かして山梨を出て放浪した。

そこで出会った仕事の多くは農業だった

明野村の開拓農家。北海道の酪農　長野県川上村の高原野菜
そして成田空港反対派農家での研修をへて沖縄西表島に移住して25年いた
さとうきびとパイナップルをつくった
農家民宿をオープンさせ、全国から農を求める人が集まっては去りとどまっては
赤ちゃんが生まれたりした

時々ミレーの視線を感じる

畑をたがやしているとふと背中に視線を感じてふりかえると鳥だったり空の光
だったりミレーだったりする
ミレーは優しかった　貧農に共感し

たぶん自身も種をまいていたんだろう
種をまく人との出会いがなかったら僕は百姓になっていなかっただろうと思う

そして僕は残りの人生も絵をかき歌いつづける
文化不毛だった山梨に40年前にまかれた種は、根をはやし大地に文化の花を咲
かせているんだろうか

「大丈夫」ほら遅いことなんてないよ　いまからも種をまきつづけよう

ミレーに支えられて

杉山万珠子　静岡県　66歳

大学で園芸学を学び、25才で私は農家に嫁いだ。丁度同じ頃、ミレーの絵画を常設する山梨県立美術館が開館。ミレーの作品の数々は、質素で勤勉な農民生活が描かれ、そこからは、おだやかで安定感漂う田園の恵みが感じられた。私はエッチングの《仕事に出かける人》をお守りのように玄関に掲げ、仰ぎみては農作業にいそしむ日々を重ねてきた。

ところが、その私が50才を目前にして命にかかわる難病を患い東京の病院に入院せざるを得なくなった。そんな折、渋谷でミレー展がひらかれた。大地の恵みを信じ黙々と働く人々が描かれている《羊飼いの少女》《晩鐘》《落穂拾い》……。作品の前に立つと絵の中に私の四半世紀の日々がみえてきた。これからどう生き直してゆけばいいのか‥‥。とめどもなく涙があふれてその場に立ちつくした。

幸い病は快方に向かい、くらしをたて直して2017年秋、我が身をふりかえる意味を込めて、40年ぶりに山梨県立美術館を訪れた。ミレーの作品の世界からやや距離をおいていた私が絵と再会すると、ミレーの絵はおちついた色調で、静かにあたたかく私を包み込んでくれた。そして、その瞬間(とき)声がきこえた。「おまえらしく生きよ」と……。

母にとってのポーリーヌ・オノ

長谷部美佐子　山梨県　61歳

いつからだったのだろうか。母の部屋の鴨居の上にポーリーヌ・オノの肖像画がかかっていた。とても母の普段の生活からは想像もできない。農家で生まれ農家に嫁ぎ、父が勤めに出た後ほとんど一人で葡萄を作っていた。1年かけて収穫の時を迎えるまで剪定や消毒、ジベ処理、房作り、傘かけなど数え上げたらきりがない仕事。手入れ箱詰めそして、出荷組合までテーラーで運んでいく。途中から軽トラックにはなったが。

3人の子どもを育てあげ、それぞれが結婚し、少しはホッとした時間ができたのかもしれない。共稼ぎの私の子供達の面倒も見てくれた母であった。

時々のぞいた母の部屋にいつの間にか孫たちの写真の隣に飾ってあった。意外だった。母がこの絵を好きなんだ。不思議だった。

今は脳梗塞で倒れて5年経つ。どうして好きなのか聞くことはできない。ただ、何回か行ったことのある美術館で選んだ母の一枚。凛とした瞳が印象的なこの絵を私も好きになった。

ワークショップでひらいた世界

五味雅子　山梨県　64歳

6年生だった息子は、夏休み自宅謹慎になってしまった。行き場のない息子を美術館へ誘ってみた。ミレーの作品を模写できるという機会を与えられ、彼なりに一生懸命集中して作品を仕上げ満足そうだった。時間を持て余していたので、それからは毎日自宅でスケッチに励んでいた。自宅店舗に飾られている大黒天の像を集中して描いていた。ミレーの模写がきっかけになり描く楽しみを与えられたようで、長すぎると心配していた夏休み、自分を見つめながら穏やかに過ごすことができた。拾ったお金を勝手に使い込んでのなさけない謹慎ではあったけれど、今は笑話になっている。あの時から20年以上の時が流れ、二児の父となった息子は時々子供達を美術館に連れて行っている。美術館の模写がきっかけで自分を見つめ直し、世界が開けたのだと親として感謝している。あの時描きこんだ大黒天は、今は家業の製品の顔になっている。

The Green Bird

宮﨑泰輔　東京都　12歳

種をまく人の肩に
一羽の鳥がやってきた

鳥は赤い実をくわえていた
種をまく人は思った
歌を歌いたいと

鳥は紫の実をくわえていた
種をまく人は思った
ワインが飲みたいと

鳥は黄色の実をくわえていた
種をまく人は思った
ありがとうがんばるよと

鳥は空へ飛んでいった
種をまく人は
手に彩やかな実を持って
見上げていた

ぼくの肩に
一羽の鳥がやってきたら
鳥はきっと青い実をくわえ
ているだろう

そして
ぼくは原っぱで横になる
空を眺める
この地球で
生きていることを
実感する

美術館のお土産に水彩絵の具を買い、家で鳥の絵を描きました。鳥と種をまく人のやりとりを詩にしたら、こんな感じだろうなと想像してこの詩を書きました。

美術館の庭

小沢弘美　山梨県　51歳

つかまり立ちを始めた長女の夕方泣きに途方に暮れ、ふと思いついて寒風吹きすさぶ中、山梨県立美術館の庭へ足を運んだ。美術館の庭には、娘と同じ年頃の男の子を抱いたママがひとり佇んでいた。

その日から私の数年間にわたる美術館お散歩ライフが始まった。

冬は暖かい陽ざしのある昼間に、夏は暑さのひいた夕方にと季節に合わせて、美術館の庭へせっせと通った。

いわゆる“ママ友”も日を重ねるごとに増え、どんどん楽しくにぎやかになっていった。

春は桜の下にシートを敷いてお花見をし、秋にはどんぐりを拾う子どもたちの愛らしい姿を眺めながらたくさんたくさんおしゃべりをした。

同じ子育ての悩みを持つママ友たちと過ごす時間は癒しであり、活力のもとだった。

あんなに小さかった子どもたちも今は社会人となり、件の長女は大学で美術史を学び、県立美術館で実習をさせていただいた。今も時折美術館を訪れてはミレーの絵を眺めているようだ。

現在、私はときどきママ友たちと老後や年金や健康の話を肴に楽しいお酒を酌み交わしている。

いずれ、主人とふたり美術館の庭を散歩する日々を過ごすのだろう。そして特別展を一番乗りで鑑賞したりするのかもしれない。

あなたと美術館デイト

長月ひとみ　山梨県　22歳

私、二十歳。
彼、ひとつうえ。

はじめての美術館デイト

ミレーの絵の点字を触り
落ち穂拾いを一緒に眺める

静かな美術館デイト

おなかがすいてランチ
ふたりで大人のお子さまランチ

おとなの美術館デイト

あなたとアートに触れる
同じときを刻むのが
私は嬉しくてたまらない

誕生日に美術館デイト

好きな芸術を好きなだけ楽しむ
同じ趣味で同じ考え
素敵な大切な誕生日プレゼント

今年で出会って3年目
これからも美術館でのドキドキを
忘れずにあなたとともに

いまのわたし

竹之内さやか　神奈川県　32歳

あなたは覚えているかしら。
私に蒔いた種のこと──

1990年、隣接する幼稚園の年中組だった私は、お弁当片手に美術館のお庭へ散歩する時間が楽しみだった。芝生の丘で南アルプスを望みながらおにぎりを頬張って、甲斐の門を滑り台に見立てて遊んだ後は、リトルバードに両腕広げて触れてみる. . .
私の好奇心の先にはいつも芸術があった。

そんな中、一際インパクトを受けたのは、深い赤色の大きなハコ。それが前川國男氏の作品であることなど5歳の私は知る由もなく、ただただその力強くも上品なディテールをぼーっと見上げ、生まれてはじめて建築を美しんでいた。（残念ながら当時鑑賞した館内作品は覚えていない）

いま、建築の仕事に就き、
アートと山が趣味のわたし
これはただの偶然でしょうか。

あの頃五感で得た種が、
今も私に根を張り続ける。

私のはじめての美術館、山梨県立美術館。
どうもありがとう。そしてこれからも. . .

追伸
芸術作品はそれを配する空間との相性で、価値や魅力がより引き立つものだと思う。
ミレー×前川國男
バルビゾン派×モダニズム建築
あなたのその素晴らしいマリアージュは、もっと称賛されるべきよ。
本当は私だけの秘密にしておきたいけれど。

名取英博　山梨県　45歳

県立美術館から拡がった自分の世界

山梨県立美術館の最初の思い出といえば、オープン時に両親・2人の妹と訪れた際に、3月に生まれたばかりの妹がお漏らしをしてしまい、係の人と母が大慌てで処理をしていたことです。

何周年目かの特別展の際に、海外から《種をまく人》が山梨に来て2枚の作品が揃った展覧会でも作品の見学もそこそこに、お漏らしをしたその場所を確認しにいったものでした。

高校卒業直前に父が急死し、アルバイトにいった会社で美術品輸送という業務があることを知りました。何かの予定変更で急きょ美術館の展示作業に従事し、作品を取扱う間近で工具や保護材等の用具を運ぶ作業を行いました。

この県立美術館での貴重な体験が、現在の会社に入社する大きな契機となり、諸先輩の薦めで美術品を取扱う専門講習を受講し、県立美術館が所蔵する作品はもちろん国内外の様々な作品の展示方法や輸送・保管について、学芸員の先生方や美術品事業部の方たちの指導のもと多くの技術を習得することができました。

そのお陰で日本各地の美術館や所蔵家・作家の元を訪ねるなど、県立美術館との関わりとその多くの貴重な経験は、私の人生の中で何事にも優るものとなっています。

現在は、今年3月にインフルエンザに罹患しその後脳症・髄膜炎を発症したため、四肢の痺れや不随意運動に苦しみ、リハビリを続ける毎日を過ごしています。これまで会社で頑張ってこられた美術品輸送業務への復帰への強い想いとともに、私の人生にたくさんのすばらしい経験をくれた「県立美術館」は家族の思い出と仕事としての艱難辛苦がつまった収蔵庫であるといえます。

1978▶2018

種をまく 世界がひらく

山梨県立美術館

Yamanashi Prefectural Museum of Art